

盆栽産地の活性化に向けて

■ 香川県盆栽生産振興協議会、高松盆栽輸出振興会 ■

(東讃農業改良普及センター 加畑真理)

●対象の概要

高松市鬼無町、国分寺町では盆栽の生産が盛んに行われており、その歴史は約200年前に遡る。県内の盆栽産地の大半がこの2町に集中しており、両地区の生産者数は187戸、生産面積は11haである。

香川県盆栽生産振興協議会は、県内の盆栽の生産振興を図るために昭和57年に設立され、県、高松市、JA香川県、鬼無町および国分寺町の生産者で構成されている。また、近年では「BONSAI」が海外で高く評価されており、盆栽の輸出拡大が期待されている。そこで、盆栽の輸出拡大とブランド化の推進のために、平成25年に高松盆栽輸出振興会が設立され、EU加盟国向け盆栽の輸出や勉強会の開催に取り組んでいる。

さらに、令和2年には、高松市国分寺町に盆栽の情報発信の拠点施設となる「高松盆栽の郷」が整備された。高松盆栽の郷推進協議会を中心に、高松盆栽の郷における盆栽の販売や高松盆栽の郷フェスタなどのイベントの実施により、益々盆栽産地の活性化が期待されている。



高松盆栽の郷

●課題を取り上げた理由

盆栽は現在、国内販売はもとよりヨーロッパやアジア諸国など海外へ輸出されているが、輸出相手国ごとに、様々な検疫条件が設けられており、生産者にとって大きな負担となっている。

また、海外への進出が進む一方で産地での盆栽の生産量は年々減少しており、将来的に商品が不足する可能性が危惧される。さらに、生産者の高齢化や世代交代が進む中で、熟練生産者の技術が若手の生産者に継承されていないという問題も見られる。

そこで、生産者間での栽培技術の継承をはかるとともに、輸出解禁や輸出検疫条件の緩和に向けた取り組みを行うため、以下の活動に取り組んだ。

●普及活動の経過

1 巡回指導および講習会・勉強会の実施

個々の生産者の栽培・経営の状況を把握するため、JA担当者と連携し、香川県盆栽生産振興協議会の役員および概ね50代以下の若手生産者を中心に、個別に巡回指導を行った。続いて、巡回指導を通じて得られた情報をもとに、病害虫防除所や熟練生産者数名と連携して、盆栽の病害虫防除や生産技術を学ぶ勉強会を開催した。

2 接ぎ木の情報収集と技術の検討

松盆栽の苗木生産方法として、その多くは接ぎ木により増殖される。産地内での苗木生産はこれまで主に熟練生産者が担っており、若手生産者の多くは苗木生産を行っていなかった。しかし、近年、熟練生産者の高齢化により苗木生産量が減少し始め、将来的な盆栽の生産量の減少が危惧されるようになった。このような状況のもと、平成31年2月および3月に、盆栽生産振興協議会と連携して熟練生産者を講師とした接ぎ木の講習会を開催した。

さらに、初心者が技術を習得して熟練生産者と同様の高い活着率を得るためには一定の期間が必要となることから、まず熟練生産者の接ぎ木の方法を写真および動画で撮影し、熟練生産者の技術の要点について分析した。また、初心者でも高い活着率が得られる接ぎ木法について検討を行った。

3 松盆栽の輸出解禁・輸出条件の緩和に向けた取組

EU加盟国向けの輸出において、マツ属の中で輸出が認められているのは五葉松のみで、黒松については輸出が認められていなかった。

こうした中、平成27年に生産者からの要望を受け、本県から国へ要望書を提出した。平成29年度から令和元年度までの3年間、農研機構生研支援センターの支援を受け、同中央農業研究センターおよび果樹茶業研究部門、筑波大学、香川県ならびに生産者によるコンソーシアムを設立し、「革新的技術開発・緊急展開事業」の中で、黒松の輸出解禁に必要となる病虫害防除方法の開発に取り組んだ。普及センターでは、病虫害防除所と連携して、EU加盟国が侵入を警戒しているマツ類葉さび病、こぶ病およびゴマダラカミキリの盆栽産地での発生状況調査の実施と、防除暦を作成し、この防除暦をもとに盆栽産地での防除体系を確立した。

●普及活動の成果

1 生産者の意識の向上

巡回指導を通じて生産者から現状の聞き取りをすすめたところ、若手生産者の多くが、栽培・生産技術について学ぶことや生産者間での情報交換の場や機会を求めており、熟練生産者からも、若手生産者に技術を伝えることに対して前向きな回答が多かった。そこで、病虫害防除所と連携して、若手生産者から要望が多かった病虫害防除に関する勉強会を開催した。また、熟練生産者と連携して、真柏の彫刻の勉強会を実施した。いずれの勉強会も、10名以上の生産者の参加があった。

そして、これらを機に熟練生産者から「自分の技術を若手に教えたい」という声が挙がり、若手生産者を中心に有志の生産者グループが接ぎ木の勉強会を行った。このように、巡回指導や勉強会の実施により、盆栽の生産技術の習得に対する生産者の意識の向上が見られた。



真柏の彫刻を学ぶ若手生産者

2 接ぎ木法の見える化

熟練生産者5名に協力を依頼し、これらの生産者の接ぎ木の様子を写真および動画で撮影するとともに、接ぎ木法について聞き取りを行い、盆栽の接ぎ木についてまとめた資料を作成した。

接ぎ木法の検討の結果、接ぎ木のポイントとなるのは形成層を合わせることで、切り口の断面を平らに切ることができれば形成層同士が合いやすくなり、初心者でも比較的高い活着率を得られることが明らかとなった。

3 EU加盟国への黒松輸出の解禁

盆栽産地での調査の結果、EU加盟国が警戒しているマツ類葉さび病、こぶ病およびゴマダラカミキリはいずれも確認されなかった。また、作成した防除暦どおりの防除を行うことで、これらの病虫害の発生を防げることが分かった。

本事業で得られた結果をもとに日本政府とEU加盟国との交渉が行われ、令和2年10月からEU加盟国への黒松盆栽の輸出が可能となった。これにより今後の輸出拡大が期待される。

●今後の普及活動の課題

1 巡回指導・勉強会等を通じた栽培技術の継承

今後も、産地および関係機関と連携しながら、定期的な勉強会の開催をすすめていくことが求められる。加えて、若手生産者が勉強会の受講といった受け身の姿勢だけではなく、自ら熟練生産者のもとに技術を教わりに行くなど能動的に動けるように、巡回指導を通じて働きかけていく必要がある。

2 松盆栽の苗木生産と栽培技術の継承

熟練生産者による接ぎ木の写真・動画および作成した資料をもとにして、接ぎ木のマニュアル化を検討する。

3 松盆栽の輸出拡大に向けた取組

EU加盟国向け黒松盆栽の輸出登録および防除暦を参考にした病虫害防除について、巡回指導等を通じてさらに生産者に呼びかける必要がある。

また、令和2年度から、農研機構生研支援センターの支援を受け同中央農業研究センター、埼玉県、千葉県、香川県、福岡県による新たなコンソーシアムが設立され、「イノベーション創出強化研究推進事業」の中で、関係機関と連携して、センチュウ類の防除方法や根洗いに伴う盆栽の品質低下の抑制に向けた対策に取り組む必要がある。